

# 日本漢文学研究の現状と課題

二松学舎大学の21世紀COEプログラムの目標

二松学舎大学 佐藤 保

## 前言

本シンポジウムの主催者である台湾大学の黄俊傑教授からご指示のあった私の講演題目は、「日本漢学の研究方法」(日本漢学的研究方法)であり、且つまた、今回参加の方々の題目を見ると、「大学の漢学研究方法」とか「分野での研究方法」とあるので、本シンポジウムのキーワードが「研究方法」であることは、明らかである。

ところが、この「研究方法」というのが、私にとってはなかなかの難問である。なぜならば、私の専門は中国古典文学の研究であって、日本漢文学の研究を特に専門としてはいないからである。日本における中国文学が、日本漢文学と表裏一体の関係にあることはいまさら言うまでもないが、これまで私は中国文学研究の範囲内でしか日本漢文学研究と関わりをもっていなかった。あるいは、恩恵を蒙っていなかったと言うべきか。に過ぎず、いま求められているのが、日本漢文学研究ないしは日本漢学研究全体の、それも日本のみならず広く世界を視野に入れての「研究方法」の検討となると、それは私の能力をはるかに超えた課題であり、ほとんど何も申し上げることはできない。

私の今日のお話しは、結局のところ、昨年(2004)、日本の文部科学省の21世紀COEプログラム「革新的な学術分野」に採択された二松学舎大学の「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」の目的や具体的なプランを、同プログラムの設計の段階から統括責任者として関係してきた立場から説明し、その説明を通じて、日本における日本漢文学研究ないしは日本漢学研究の現状と課題、

ひいては研究方法の一端に触れるよう、話を進めて行きたいと考えている。

## 1、日本漢文学研究の基礎

この種の議論をするときに我々がいつも逢着する問題は、我々が検討すべき対象の定義の問題で、すなわち「日本漢学」ないしは「日本漢文学」とは何か、という問題である。これは、最も基本的な問題ではあるが、「日本漢学」ないしは「日本漢文学」は、個々の研究者の立場や関心によって微妙に異なる多様な定義づけがなされており、万人に異議なく認められる確かな定義を下すことはきわめて難しい。例えば、2001年の台湾大学中文系・清華大学中文系・漢学研究中心共催の「日本漢学国際学術研討会」の論文集である『日本漢学研究初探』（張寶三・楊儒賓共編）を見ても、「日本漢学」が日本学 Japanology に属するのか、それとも中国学 Sinology に属するのか、ということからして議論の重要なポイントになっていて、いまだに学界の意見は一致していない。おそらくすべての人たちが日本漢学は伝統的な日本の学術・文化の根幹であると認めながらも、その定義については、絶えず議論を交わしている状態である。思うにその決着が見られない最も大きな理由は、「日本漢学」の語義の曖昧性 漠然と「日本における中国学及び中国的学術・文化」といった大きな概念なのか、はたまた「日本人の手になる（著述する）中国的学術・文化」とかなり限定的にとらえるべきなのか にあるのである。すなわち、「日本漢学の研究方法」という問題を難しくしている理由は、研究方法を検討すべき対象それ自体がフアジー fuzzy な存在だからであろう。

もちろん、学問研究においては、研究対象の明確な定義づけ、ないしは範囲の限定が、その出発点となることは言うまでもない。したがって、私も当然この定義づけの議論に加わって私個人の意見を開陳すべきところではあるが、与

えられた貴重な時間を浪費しないよう、その議論はしばらく措いておいて、我々二松学舎大学の21世紀COEプログラムが対象とする「日本漢文学研究」の「日本漢文学」を簡単に説明して、速やかに本題に入りたいと思う。

日本漢文は、元来、漢字漢語（中国語）を基礎とする中国の学術・文化を受容する過程で日本人が創り出した訓読という独自の方法による表現様式であり、同時にまた訓読法を通じて受け入れた中国の学術・文化の内容そのものをも意味している。さらにそれは、単に受容のみにとどまらず、むしろ漢字漢語を自家薬籠中のものにした日本人の手になる漢字漢語文献を広く意味する場合が少なくない。すなわち前近代においては、日本漢文は東アジア漢字文化圏の共通語としての性格を持ちつつ、日本のすべての学術・文化の根幹であったのである。このように学術・文化の全領域を包括的にカバーする日本漢文を対象とする学問を、我々は日本漢文学と呼ぶ。

これは、我々のプログラムが本年9月に開く国際シンポジウム「世界における日本漢文学研究の現状と課題」を呼びかける趣旨説明の一部である。つまり、我々の考える「日本漢文学」は、訓読によって成り立つ「日本漢文」を基礎とし、それによって支えられている「学問」すべてをさすものと、とらえているのである。いささか言葉遊び的な嫌いはあるものの、簡単に言えば、「日本漢文ノ学（問）」が我々のいう「日本漢文学」である。さらに言うならば、それは、もっぱら日本人の作る漢詩文だけを対象とするいわゆる文学的な日本漢文学のみを意味するのでは決してなく、文学・哲学・歴史学・宗教学・医学・音楽学等々の幅広い学問・芸術諸分野の、日本人の手になる漢文文献を網羅的に対象とする学問をいう、と言ってよいであろう。我々があえて「日本漢学」を用いない理由は、一般にこの言葉の内包する意味が哲学・思想を中心とした中国的な「経学」をさすことから、文学・芸術的なものが排除されるのを懸念し

てのことである。以上の理由から、私は主として「日本漢文学」という言葉を本報告で用いながら話を進めて行きたい。

すでに上述のことから明らかなように、日本漢文学を研究する場合にまず必要とされる条件は、日本漢文の基本である「訓読法」の習得である。もちろん、訓読法習得の前提となる日本語、それも日本古典語（文言）の学習が必要不可欠であることは、日本漢文学に限らず日本学のあらゆる分野に従事する研究者に求められる最も基礎的な条件であるから、ここでは日本古典語学習の問題まではあえて言わず、日本漢文学の研究には日本語の一種である訓読の学習を最低の条件とする、というに止めておこう。

次に言える最も基礎的な条件は、日本漢文学の研究には中国古典の学習が欠かせないことである。元来、日本漢文は中国古典の受容と解釈から生まれたものであるから、日本漢文の淵源とも言うべき中国の伝統的な諸学問及びその媒体としての古典漢語（中国語文言）の知識なしには、日本漢文学研究はあり得ない。そして、日本人の創作的漢文著述の手本もまた、内容・形式とも、中国の古典であるのである。

このように、作者（著述者）や読解法の面から言えば、日本漢文学は明らかに日本学の範疇に属するが、内容及び表現媒体・様式（中国語の文言）の面からは中国学に入れても決しておかしくない。まさに、日本漢文学又は日本漢学が、日本学と中国学の二面性もしくは混成的性格 hybridism をもつ所以は、もともとその成り立ちに由来するのである。

## 2、二松学舎大学COEプログラムのめざすもの

### （1）漢文教育

日本漢文の発端をいずれの時期におくかは問題にしても、古くは中国の漢代

に中国文化に触れた日本人が、中国文化を長い年月をかけて不断に摂取し、学習し、模倣し、そして発展させてできあがった日本漢文が、近世・江戸期において最高潮に達したことは、学界公認の定説である。江戸期にはあらゆる分野で漢文による著述（日本人の漢詩漢文作品）がなされ、おびただしい数の漢籍（中国書）の翻刻（和刻本）と多数の優れた注釈書又は再編本（準漢籍）が公刊された。その中には、明治の維新革命の原動力ともなった海外事情を伝える漢籍の翻刻や漢訳洋書を大量に含んでいた。<sup>(1)</sup>注目すべきは後者の漢訳洋書で、当時の日本人で英語・フランス語・ドイツ語など欧米先進国の言葉に通じている人、あるいは言葉は理解できてもそれらの国々で出版されている原書を手に入れる人はともにきわめて稀な存在であったが、漢語漢文に訳されてさえいれば、理解できる人は決して少なくなかったのである。江戸期の漢文教育の普及は、寺子屋や塾の隆盛を通じて、一般庶民にまで広がっていたからである。

しかし、皮肉なことに、海外事情を伝える漢籍や漢訳洋書の力で維新革命を実現したあと、欧米先進国型の近代化をめざして洋学の重視がしだいに強まるにつれて、日本人の漢学漢文に対する関心は急速に衰えて行った。明治の初期に学校教育の主導権をめぐる漢学・国学・洋学の三派が熾烈な争いをしたことはよく知られており、<sup>(2)</sup>結局のところ「和魂洋才」のスローガンのもとに、倫理道德面における漢学、実学的側面における洋学と、それぞれの効果を認め合う形で折り合いがつけられたのであるが、倫理道德の教育を担当する漢学の勢いは時代が進むにつれて劣勢に追い込まれ、日本の伝統的な学術・文化を支えてきた日本漢文・日本漢学の危機がしばしば叫ばれるようになった。「東洋の

---

<sup>(1)</sup> 拙論「近代における日中文化交流の黎明期 その調査・研究の概況」を参照されたい。浙江大学日本文化研究所編『江戸・明治期の日中文化交流』（農山漁村文化協会、2000・10）所収。

<sup>(2)</sup> このことについては多くの論著がある。例えば、町田三郎『明治の漢学者たち』研文出版、1998・1。拙論「黄遵憲と日本漢学者」（『國學院大学中国学会報』第38輯、1992・10）もこのことに言及する。

精神文化」を教育の基礎とする国家有為の人材育成を志した中洲三島毅が、明治10年(1877)に漢学塾の二松学舎を創設したのは、漢学派の動きの中で最も早いものの一つであったが、それから30年余りが経過した明治43年(1910)5月の「東亜學術研究会設立主意書」には、次のような文章が見える。

支那學術の我が国に入り我道德、學術、言語、文章に影響したること深く且つ大なり。我道德、學術は之によりて弘遠精密を致し我言語文章は之によりて雄大崇高を加へたり。独り過去を回顧して如上の影響を認むるのみならず、現在を觀察するも支那學術の我徳教文学に多大の勢力を有するを知るべし。支那の聖經賢伝は殆んど教育に関する聖詔の注脚にして人格の造就に資すること甚だ多く其徳育上に於ける価値は何人も之を否定すること能はず。国語国文の発達に支那文学に負ふところ少なからざるは此れ亦争ふ可からざるの事実なり。支那學術研究の必要は多言を須ひずして自ら明白なるべし。

(後略)

この「主意書」にいう「支那學術」は今日の「中国学」というのにほぼ等しいが、東亜學術研究会が「我学界の特色」と自認するのは「支那に起り我国及び韓国等に伝はりて各特殊の発達をなしたる學術文物の研究」で、いわゆる日本漢学の研究を標榜する學術団体の設立であったのである。同研究会は設立と同時に月刊雑誌『漢学』を發刊した。研究会(学会)と塾との違いはあるものの、中国の學術が徳育に大きな価値を有するという考えは、上述の三島中洲とまったく同じと言うことができよう。

『漢学』第壹編(明治43年5月~12月)に掲載された論文の幾編かを見ても、当時の漢学界の錚々たる重鎮たちが執筆している。

日本的漢学に就いて

文学博士

重野 安繹

修養に未発已発両時の別なし 文学博士 三島 毅

日本に於ける漢学の効果(上)(中)(下)(完)

文学博士 星野 恒

孔子の集大成(上)(中)(下) 文学博士 服部宇之吉

集まった顔ぶれから一見漢学の隆盛を思わせるが、実情は世間の洋学重視に対する危機感が彼らを結集させたと見るべきである。「主意書」には上文に続いて次のような言葉が見える。

研究に必要な設備に於ても亦研究の成果に於ても、亦動もすれば欧米の後塵を拝せんとするものあるが如きは吾人竊に我学界の為に慨嘆自ら禁ずる能はざるところなり。

この言葉から、我々は、明治末期の日本漢学の置かれていた状況に日本漢学の指導者たちが深刻な危機感を抱いていたことを知るのである。

それでもまだ、大正・昭和期を通じて、第二次世界大戦で日本が敗れるまでは、旧制中学などの中等教育の場で漢文の授業が相当の時間をかけて行われていた。しかしながら、敗戦後は状況が一変する。戦勝国アメリカの進んだ科学技術を手本とする近代化、革新を求めての伝統批判などの風潮により日本の漢文教育は一段と等閑視されるに至った。まして、近年のパソコンなどIT機器の普及で一般の漢字離れは著しく、中学・高校で漢文を教える教員の力量低下、さらには国家の教育行政のありかたとも相俟って、国語科教育の中で占める漢文教育のための時間は減少の一途をたどっている。<sup>(1)</sup>我が国の漢字漢文の理解力、読解力は、今や悲劇的な状態にまで落ち込んでいるのである。この低落傾向に歯止めをかけようと組織されたのが全国漢文教育学会で、20年前の昭和

---

<sup>(1)</sup> 二松学舎大学21世紀COEプログラムが昨年(2004)開催した国際シンポジウム「東アジアにおける漢字文化活用の現状と将来 日本・中国・台湾・韓国における漢文教育と漢文教科書を中心に」の「資料集」(2004・8)と「報告集」(2005・3)に日本の状況が記載されている。

60年(1985)に設立された。

二松学舎大学のCOEプログラムは、日本漢文学研究の基礎づくりという観点から、事業推進担当者のなかに漢文教育班を作って、明治以来の漢文教科書収集及び調査・研究を行い、並びに大学学部生の漢文理解力を高めるための漢文教科書の編集を行っている。今年度は試行本を実際の授業に使用して、『二松漢文』の定本づくりに取りかかった。なお、漢文教科書の調査結果は、データベース化してやがて公開する予定である。

## (2) 若手研究者の育成と書誌的調査の専門家の養成

上記の漢文理解力 換言すれば、漢文訓読の能力 の向上を大前提として、日本漢文学研究を振興するためには、後継者である若手研究者の育成が重要である。文部科学省の21世紀COEプログラムが目的とするところも我が国の大学院教育の充実と発展にあるので、我々のプログラムでも大学院の中国学専攻のカリキュラムにおいて日本漢学講座を明確に位置づけ、若手研究者育成の積極的な方向を示した。

現在、二松学舎大学の大学院文学研究科は国文学専攻と中国学専攻の2専攻から成り、中国学専攻は中国学講座・日本漢学講座・総合文化学講座の三つに分かれている。総合文化学講座には、日中文化交流・日中比較文化のほか、朝鮮学との関連を重視する東アジア漢字文化圏比較文化等の授業科目が開設されている。ここでいう講座は、コース・分野というのに等しい。

これら通常の授業科目のほかに、本プログラムの事業として、今年度は4名の講師による日本漢文学関係の特別講義が実施される。対象は学内外の大学院生及び一般社会人で、学外者は公募による。講義はすべて公開制を建て前として、通年の講義あるいは集中講座の形で行われる。担当の講師はCOE客員研究員(教授)・本学名誉教授・本学客員教授である。



二松学舎大学のCOEプログラムは、中国学専攻を中心に国文学専攻と東アジア学術総合研究所が協力して進められているが、従来、我が国の日本漢文学研究は、主に日本文学（国文学）専攻、そしてそれよりはやや数が少ない中国文学（中国学）専攻で行われてきた。戦前ではそう珍しくもなかった漢文学（漢学）専攻の名称が今ではほとんど姿を消して、漢文学は日本学か中国学かいずれかの専攻に吸収されているのである。しかし、より効果的且つ積極的に若手研究者の育成のためには、消えた漢文学専攻を復活させて専門の専攻 日本漢文学（日本漢学）専攻 を設け、専門スタッフの充実を図って、独自の教育・研究体制を整えなければならない。なぜならば、日本漢文学（日本漢学）研究が進展してくれば、それは文学のみならず歴史学・宗教学・医学・芸術学など広い領域にかかわるので、既設の専攻への間借りではすまなくなると思われるからである。あるいは、可及的速やかに間借りを解消すべきである、というべきかもしれない。

若手研究者の育成としては以上のほかに、大学院博士課程後期を終えたポスト・ドクターコースの若手をCOE研究員に採用し、研究費を支給して2年間の研究を保証している。世界の研究拠点校としての責任から、COE研究員は別に二松学舎大学の出身者とは限らずに他大学出身者も受け入れて、現在、本学出身者3名、他大学出身者1名の計4名が研究活動を行っている。

書誌学的調査及び整理の専門家（専門技能者）の養成は、図書館・研究所等の日本漢文学関連の書物や文献資料を取り扱う人々を対象とするものである。後述するように、日本漢文学関連の書物類は、中国書の漢籍と日本語の和書・国書の狭間に位置するために、両者と部分的には重なりつつも、なお両者から漏れる部分が多いという甚だ厄介な存在である。各図書館・研究所等で編纂されている漢籍目録や国書（和書）目録は、原則的に日本漢文関連の書物を排

除し、それらは多くの図書館等で未整理本として放置されているのが現状である。我々のプログラムは、これらの未整理本の調査と整理、漢籍や国書に混入している日本漢文関連の書物の識別・整理のための専門家を養成しようというもので、これもすべて公開の形で、短期集中の演習講座・特別演習を開講する。担当者は本プログラムの事業推進担当者と研究協力者である。

これまで、漢籍整理の専門家養成講座は、東京大学東洋文化研究所及び京都大学人文科学研究所が定期的を実施しており、国書については国文学研究資料館が同種の養成講座を開いているが、<sup>(1)</sup>日本漢文学関連の書物に限定しての専門家養成講座は、本プログラムが本邦最初である。<sup>(2)</sup>

### (3) 研究者の国際的交流と共同研究

学界において日本漢文学研究の位置づけがきわめて曖昧であることは、すでに述べたとおりである。日本漢文学・日本漢学の専門研究者は、日本文学や中国文学の研究者に比べて数の上では圧倒的に少数であり、またその所属も専門の専攻・学科にまとまっているのではなく、文学・哲学・歴史学・医学・芸術学など多種多様な分野に広がっているため、どうしてもバラバラに散在しているとの印象を否めない。おそらく、日本で日本漢文学研究者が最も多く参加している学術団体(学会)は、昭和58年(1983)年に設立された和漢比較文学会であろう。日本文学と日本漢文学の研究者が集結している同学会は、機関誌の『和漢比較文学』を毎年2回発行し、年1回の研究大会を開催する。

現在、日本学術会議に登録されている学術団体・学会の中に「比較文学会」を名づけるものがほかにもあるが、全国規模の和漢比較文学会を除けば、ほぼす

---

<sup>(1)</sup> 国文学研究資料館は、通常の司書養成講座のほか、海外の日本語資料を扱う司書養成のための特別な講習会「海外司書日本古典籍講習会」Practical Workshop for Overseas Librarians on Early Japanese Booksをも実施している。

<sup>(2)</sup> 二松学舎大学COEプログラムの、平成17年度(2005)前半の若手研究者と書誌専門家養成のための公開講座の詳細は、別紙資料1を参照。

べて大学の研究室単位といったレベルの小規模学会である。

むしろ、日本漢文学研究者が比較的多数参加している全国規模の学会は、日本中国学会と東方学会である。両学会の研究大会や、機関誌の『日本中国学会報』・『東方学』に、日本漢文学関係の研究成果が公表される場合が少なくない。

以上のように、日本漢文学の研究者はいまだに十分組織化されていないために、研究者同士の学术交流も満足すべき状態にはない。そこで、我々のCOEプログラムはこの問題に対処すべく、毎年1回の国際シンポジウムの開催と、国内外の研究者を招いて広く学外者にも呼びかける公開講演会と、主としてプログラム担当者のためのテーブルスピーチをそれぞれ年数回開くことにした。プログラムの発足した昨年(2004)は採択の決定が遅れて半年の期間しかなかったが、先の「漢文教育」で紹介した国際シンポジウム「東アジアにおける漢字文化活用の現状と将来」を開催し、また海外から6人、国内から2人の専門家を招いて3回の公開講演会と7回のテーブルスピーチを開いた。(注)

今年は9月の初めに、国際シンポジウム「世界における日本漢文学研究の現状と課題」を開催する予定である。報告者はオランダ・アメリカ・ベトナム・韓国・中国・日本の専門家を予定しており、2日間にわたって討論することになっている。

さらに今年は、シンポジウムの終了後、研究拠点を依頼した世界各地の拠点リーダーの集まる国際会議の準備を進めている。参加予定者は、シンポジウムの報告者のほか、昨年招聘したEAJRS(European Association of Japanese Resource Specialists 日本資料専門家欧州協会)の会長ヴァンデワレ Vande Walle 教授や、「欧州所在日本古書目録」Union Catalogue of Early Japanese Books in Europe の作成者であるイギリスのコーニッキ Kornicki 教授など、ヨーロッパ・アメリカ・アジアの日本漢文学研究者たちである。ぜひ台湾の代

表にも参加していただいて、世界規模の日本漢文学研究の情報ネットワーク作りを行い、国際的な共同研究の可能性及び研究協力体制のあり方などについて話し合いたいと考えている。

また、学术交流の面から見てきわめて重要と思われるのは、今年度末 すなわち2006年3月末 までに、学術雑誌『日本漢文学研究』(仮題)を創刊する計画である。この雑誌の用語は日本語と英語を併用し、全世界の研究者から研究論文を募って厳しい審査を行い、日本漢文学研究における世界で最も権威ある学術雑誌にしたいと思っている。

今秋9月の世界拠点リーダー会議では、この『日本漢文学研究』の編集が重要な議題になるはずである。

#### (4) 日本漢文学関係文献の所蔵データベースの作成と情報公開

一般に、学術研究には関連資料の収集と精査が欠かせない。特に人文科学においては、文献資料に関する調査の適不適、完備不完備によって、研究の価値が決まると言っても過言ではない。日本漢文学研究もまた然りで、資料の日本漢文文献の調査が研究の基礎となる。しかしながら、これまた先に述べたように、日本漢文学関連の書物はともすれば継子扱いされて、書庫の暗い片隅に放置されがちなのが現状である。我々はまず、それらを陽の当たる明るい場所にもち出して、すべての研究者が利用できるようにしなければならない。そのために我々は、日本漢文学関係文献の所蔵データベースの作成を計画した。

もともと、日本の漢文文献資料の総合的な調査とデータベースの作成については、これまで多くの機関で繰り返し構想が練られ、議論が重ねられてきたのであるが、とりわけ平成6年(1994)1月に日本学術会議が公表した「漢文資料総合学術センター(仮称)の設置について(勧告)」は重要な提言であった。当時、中国書データベース化委員会を設けて動き出していた日本中国学会

が直ちにそれを受けて検討を始めたのであるが、残念なことに、今日に至るまでこの構想は実を結んでいない。構想の大きさと多額の費用の点に問題があったからであろう。<sup>(1)</sup> 因みに、この「勸告」をまとめた当時の日本学術会議のメンバー及び日本中国学会の役員で、当時又はその後に二松学舎大学の専任教員になった者が数名おり、本学のCOEプログラムの一部は、ある意味では「勸告」の構想を継承するものと言えるのである。

#### ．日本国内の調査

さて、日本国内の調査の場合には、本来ならば我々が直接各図書館に出かけて行って、書物の存在を確認しながら書誌学的調査をすべきであるが、それでは時間がかかりすぎてデータベースの作成が何時終わるか分からないので、とりあえずは各図書館が作成した書目・目録類及び蔵書データベース等を利用して、該当する書物の情報を引き出すことにした。但し、該当する書物がありながら、又はありそうでいながら、目録類をまだ持たない図書館へは、直接出向いて調査するしか方法がない。

そこで我々は、昨年、本プログラムの採択が決まった直後に、日本国内の国立・公立・私立の図書館にアンケートを出して、日本人の著した漢詩漢文集などの日本漢文の書物、中国の書物である漢籍を日本で翻刻した和刻本漢籍、漢籍に日本人が漢文で注釈など加えたり、再編して刊行した準漢籍など、3種の日本漢文学文献の所蔵の有無を尋ね、且つ目録類及びデータベースの作成状況と、それらの情報を我々のデータベースに取り込むことの可否を問うた。

アンケートの送付先は、2003年度版（当時の最新版）の『図書館年鑑』に記載されている国内のすべての図書館に送ったため、総数は4600余りに

---

<sup>(1)</sup> 「勸告」の全文は、同年1994年刊行『日本中国学会報』第46集「彙報」欄に載っている。また、その前年の第45集の「彙報」には「中国書データベースの構築に向けて」(中国書データベース化委員会)が記載されている。

上った。寄せられた回答は約10%と、回答率はそう高くはなかったが、この結果を受け、プログラムの事業担当メンバーが手分けをして、回答のあった図書館のうち、該当する文献資料をもちながら目録類の存在が不明な図書館、すでに目録類はできているが入手困難なため、それらの複写が可能な図書館、また回答がなかった図書館でも、関連する文献資料の存在が知られている重要な図書館等、直接調査の必要な図書館に行き、実地調査を行った。

昨年度は主として北海道・東北地区の調査を行い、主要な図書館の調査はほぼすんだものの、まだ調査を必要とする図書館が若干残っている。それらは今後も継続して調べて行く予定であるが、今年度の重点的調査地域は、信州・北陸・東海地区である。このようにして、COEプログラムの事業が一段落する5年後までには、日本全国の主要な図書館の調査を終えたいと計画している。

言うまでもなく、以上の実地調査のほかに、すでに印刷物やインターネット等で公刊・公表されている目録類やデータの収集は継続し、かたわら漢籍所蔵の龐大なデータをもつ京都大学人文科学研究所・東京大学東洋文化研究所、国書のデータをもつ国文学研究資料館、あるいは広範な図書情報を集めている情報学研究所等との連携の可能性を探りながら、我々は今年度からデータベースの入力に取りかかる。おそらく今年度末には、その一部の公開が可能になると思う。

#### ・ 国外の調査

我々の目標は、日本漢文学関係文献の所蔵調査を日本だけにとどめず、世界的な規模で調査してデータベース化することである。日本書（国書・和書）については、先に述べたように、コーニッキ氏の「欧州所在日本古書目録」等が存在するので、日本国内同様、できあがっている目録類は最大限に利用する考えである。しかしながら、広大な世界各国の状況は不明な点が多く、まずは

状況把握が重要な課題となる。本年9月初めに開催予定の本学の国際シンポジウム<sup>(1)</sup>及び世界拠点リーダー会議は、この意味から情報収集の貴重な機会になるはずである。

また、本学の国際シンポジウムが終わった後、9月21日～24日にはスウェーデンのルント Lund で EAJRS の年次大会が開かれるので、そこに我々のメンバーの代表を送って、情報収集と世界の研究者たちとの交流をはかりたいと考えている。このようにして得る情報によって、我々は世界の主要な図書館について、順次、日本漢文学関係資料の有無を調査して行く予定である。

我々はすでに、昨年度は中国大陸の北京・上海・南京・杭州地区の図書館調査を実施した。大陸の図書館を最初に調査したのは、我々のメンバーの中に『中国館蔵和刻本漢籍書目』(杭州大学出版社、1995・2)と『中国館蔵日人漢文書目』(同、1997・2)の編者である王宝平教授が参加していたからである。昨夏、大学の夏期休暇を利用しての調査には王教授にも参加を願った。また、同年秋には、中国全国の古籍整理専門家が集まる会議が南京で開かれ、その会議にも我々の代表がオブザーバーとして参加した。

王宝平教授は今年3月末で二松学舎大学外国人特任教授の任期を了え、すでに浙江工商大学日本文化研究所に戻ったが、我々のプログラムでは引き続き中国の拠点リーダーをお願いしている。

### 3、まとめ

以上が、我々が進めている「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」の概要である。ただ、今回の私の話は、日本漢文学研究のおかれている現状とその改善策といったところから話を始めたために「漢文教育」が最初になったが、世界

---

(1) 別紙資料2参照。

的な研究拠点の構築という観点から言えば、本プログラムの事業の重要度や規模は、むしろ話したことの順序とは逆の、次の4つの項目が事業の柱ということになる。

- 1．日本漢文文献の所在調査とそのデータベースの作成
- 2．研究者交流のネットワークづくりと共同研究
- 3．若手研究者と書誌的調査の専門家の養成
- 4．漢文教育の研究と振興

この4項目中、1・2は世界的な規模で行われてこそ意味があるものではあるが、しかしこれらはいくまでも研究の基盤づくりであって、日本漢文学研究の実質的な研究内容の充実や向上は、学術雑誌の『日本漢文学研究』（仮題）によって実現されるべきであろう。

一般に、日本漢文学研究の傾向として、ヴァンデワレ教授の言葉によれば、アメリカの学界では理論面を重視する傾向にあり、欧州では実証的研究が重視されるとのことであるが、日本における漢文学研究の傾向は、私の印象では実証的であると同時にきわめて多彩である。

例えば、日本人が漢文を用いて創作した小説類を研究する日本漢文小説研究会や、日本の伝統音楽に関する漢文文献の調査、日本医学書の整理等々、それぞれは小規模なグループではあるが、きわめて広範囲にわたる日本漢文の研究が着実に行われている。それらの研究を支え、且つさらに研究領域を拡大するためにも、漢文文献資料の所在調査が必要であり、研究者同士の交流が欠かせないのである。

3は一応オープン・システムをとり、国内の他大学出身者を受け入れてはいるものの、国文学研究資料館のような海外からの受け入れまでは行っていない。将来的には、若手研究者のみならず、国内外の日本漢文学研究者及び書誌の専



門技能者が随時集まって研究や研修ができるような体制をつくることが望ましい。二松学舎大学の将来構想の中で、検討されなければならない。

4は、日本漢文学研究に必要な基礎学力を涵養するための施策である。我々は現在、より効果的な漢文教育を行えるようにテキストを作成中であるが、ポイントの一つを、日本人の漢文作品をできるだけ多く採用しようという点に置いている。これは何も新しいことではなく、かつて明治期の漢文教科書には日本漢文が多く採られていた。日本漢文学が日本の学術・文化の根幹であることを理解するためにも、日本人の漢文作品をあらためて見直す必要があるであろう。

最後に、日本漢学の研究方法について、『日本漢学史』の著者である李慶氏の意見を紹介して本報告の締めくくりとしたい。李慶氏は現在、日本・金沢大学外国語教育研究センターの外国人教師であり、『日本漢学史』は全5巻のうち、2002年から2004年にかけて第1巻～第5巻は出版された<sup>(1)</sup>が、残りの2巻は未刊である。

以下に紹介する文章は、第1巻の「前言」において、著者が近代日本漢学の六つの特色として挙げているものである。

- 1、近代の日本漢学を通観すると、それぞれの時期に、それぞれ政治思潮の影響を受けた部分がかかり存在する。
- 2、日本漢学の研究は、非常に資料を重視する。このことは次の三方面に表れている。
  - 1) 言語能力の涵養を重視し、原著の解説に重点を置くこと。
  - 2) 日本に所蔵されている書物の利用を重視し、また他国にない日本特有の資料を用いて研究を行うという特徴を有すること。

---

<sup>(1)</sup> 上海外語教育出版社

- 3) 新発見の文献資料に、情熱と関心を示すこと。
- 3、近代日本漢学は、西洋の漢学界と観点の異なる状況がしばしば見えること。
  - 4、近代日本漢学は、往々にして一つの研究テーマについて資料の収集完備を行い、研究を進める。
  - 5、工具書と基礎工作を十分に重視する。これは日本漢学の研究上の特徴であるばかりでなく、日本漢学研究の伝統といえることができる。
  - 6、近代の日本漢学は、非常に明確な地域的色彩を有している。即ちよく知られているように所謂“東京学派”と“京都学派”の系譜である。

以上をもちまして私の報告を終わります。ご静聴ありがとうございました。

---

(注) 公開講演会とテーブルスピーチの詳細は、以下のとおり。

#### 公開講演会

- 2004(平成16)年11月27日 徐興慶(台湾大学教授)「台湾における日本漢文学研究の現状と課題」  
同 12月16日 呉格(上海・復旦大学教授)「中国における日本漢文学研究の現状と課題」  
2005(平成17)年1月8日 W. ヴァンデワレ(ベルギー・ルーヴァンカトリック大学教授)「欧州における日本漢文研究の現状と課題」

#### テーブルスピーチ

- 2004(平成16)年10月14日 藤原克己(東京大学教授)「日本の漢文学」  
同 11月25日 徐興慶(台湾大学教授)「台湾におけるCOE」  
同 12月16日 呉格(上海・復旦大学教授)「世界の日本漢文学研究」  
同 12月22日 李国慶(天津図書館歴史文献部主任)「中国の古籍研究」  
劉薈(清華大学図書館古籍部主任)「清華大学の古籍研究」  
2005(平成17)年1月12日 W. ヴァンデワレ(ベルギー・ルーヴァンカトリック大学教授)「欧州の日本漢文研究」  
同 2月10日 石塚晴通(COE客員研究員、北海道大学教授)「日本漢文学研究」  
同 3月30日 スリヤオウバイサーン(タイ・チュラーロンコーン大学助教授)「タイにおける日本漢文学研究の現状」